

〈一般投稿論文〉 [研究論文]

否定的評価に見る規範意識と対人関係 —ポライトネス理論からの日中対照分析—*

儲叶明 (儲葉明)

筑波大学大学院

This study examines how Chinese and Japanese native speakers (CNS, JNS) express their negative evaluation when their senior or junior deviates from social norms. Data was collected through a Discourse Completion Test. The researcher observed that JNS used the semantic formula for “criticism” in order to follow “social norms”, combined with the usage of other semantic formulas such as “mitigation” and “confirmation/allusion” to indicate distance from the listener. On the other hand, CNS made use of strategies such as “cuss/abuse”, “joke/sarcasm/teasing”, “nouns of address” in order to follow “interpersonal relationships”. This study aims to promote intercultural exchange between JNS and CNS.

キーワード： 否定的評価、規範、批判、冗談／皮肉／からかい、日中対照

1. はじめに

「評価する／評価される」ことは、日常生活で誰もが経験する行為である。特にソーシャルメディアが発達した現代社会では、「評価」の即時性や頻度も、一昔前に比べて驚くほど高くなっている。筆者が本稿を執筆している間にも、「高齢者の危険運転」や「コンビニ店主が過労死寸前」などの話題が世間を騒がせている。自らが行ったことでなくても、私たちは日常的に「評価し／評価され」ている。

「評価」には、「良い／素晴らしい」のように相手や状況を肯定するものもあれば、「良くない／駄目だ」のように否定的なものもある。後者は語用論研究において「否定的評価」

* 本論は儲 (2018) の修士論文の一部および日本語用論学会第21回大会発表論文集に収録された「日中母語話者の否定的評価に関する対照研究—談話完成テストを中心に」を大幅に改訂したものである。本論の修正にあたり、大変有益で貴重なご指摘をくださった滝浦編集委員長及び3名の査読者の先生方、ご指導くださった指導教員の井出里咲子先生、修士課程の指導教員である名古屋大学の奥田智樹先生、大変有益なご助言をくださった関崎博紀先生、岐阜市立女子短期大学の小島ますみ先生、University College London 博士後期課程の王瀚氏に心より感謝を申し上げる。本論の不備は筆者に帰する。

(関崎 2014) と呼ばれている。「否定的評価」も含め、全ての評価は、何らかの「基準」に照らして行われている(樋口 2001: 43、関崎 2014: 9)。その「基準」の一つに、「規範」(norm) (関崎 2014: 9) が挙げられる。「規範」とは、「一定の状況のもとに何をなすべきか、何をなすことを期待されているか... (中略) ということについて共有している(共同) 主観的な意識、あるいはその客観化された表現としての行為基準」(世界大百科事典第2版) を指す。このような「規範」は、「人間以外の動物にはなく、ヒトという種に固有なもの」(友枝 2002: 109) であり、人間社会は「ヒト」によって構成されている以上、このような「規範」から離脱して成り立つとは想像しがたい。日々秩序正しく社会生活を送っている人々の言語行動の一つである否定的評価も、当然このような「規範」に影響され、制約され、ないしは創出される。したがって、「否定的評価」は社会における規範性を反映する「鏡」として考えられ、人々の意識の中の「規範性」の輪郭を炙り出すための一つの切り口となる。

人間が社会生活を送る上で、誰かを評価することは避けられない。一方で、対人関係というものにも日々配慮しなければならない。では、評価の背後にある「規範性」と「対人関係」は、常に矛盾しない関係性にあるのだろうか。例えば、授業中に大声で話しかけてくる友人に注意したくても、関係にひびが入るのではないかと心配することは誰にでもあるだろう。このように、日常生活の中で「規範」と「対人関係」との間にせめぎあいが起こる場面は少なからず存在する。では、こうした場面で、我々は何のような方略を用いてそれに対処しているのだろうか。

本研究は、日常的な場面で「規範」から逸脱した行動を取った相手に対し、日本語母語話者(以下、JNS) と中国語母語話者(以下、CNS) の否定的評価としての発話がいかに異なるのか、その背景にどのような戦略があるのか、その戦略が選択される背景にはどのような理由があるのかを、ポライトネス理論を用いて考察するものである。日中の否定的評価の相違を明らかにすることによって、その背後にある日中の規範、対人関係への意識を探ってみたい。

2. 日中ポライトネス・戦略の選好性

本研究は理論的枠組みとして Brown & Levinson(1987, 邦訳 2011、以下 B&L) のポライトネス理論を援用するが、ここで日中のポライトネスに関する先行研究から、その選好性を概観する。

日中の発話行為(例:「依頼」、「断り」、「褒め」など)を異文化コミュニケーションないしはポライトネス理論の視点から分析する研究は、多岐に渡って存在する(笹川 1999、小野 1998、蒙 2010、母 2002)。

笹川(1999: 177-178) は、日本・韓国・中国・タイ・インドネシアのアジア五か国の

「依頼表現」を対照し、日本語の依頼表現は「私のための依頼」であるのに対し、同じく東アジア言語に属する中国語と韓国語は共に「互恵性」の方略が用いられると指摘した。笹川によれば、日本語に比べて消極的な丁寧さを表す表現が少なく、「社会的な結びつきに訴える積極的な丁寧さの方略が、二つの言語では、より明確な形で表現されている」(ibid: 177-178) という。一方、「断り」の日中対照研究においては、JNS が用いる方略として、弁解だと誤解されないよう簡潔で細部まで強調しないばかりし表現の使用が多いのに対し、CNS は細部まで事情を具体的に述べる事が多く、そのような説明こそが丁寧だと考えられるという指摘がある (蒙 2010: 11-12)。この「断り (再断り)」のスタイル差を、日中母語話者が相互にどのように受け取るかを分析した研究に小野 (1998) がある。これによれば、CNS は JNS の断りの回答パターンに対し、「婉曲的」、「はっきり本意を表すべきである」、「主体性がない」、「偽善的」、「優柔不断」といったイメージを持った一方で、JNS は CNS の回答パターンに対して、「きつい」、「冷たい」、「率直だ」、「理由を強調しすぎている」といったイメージを持ったことから、小野は日中間コミュニケーションにおける摩擦や人間関係への悪影響について懸念を示している (小野 1998: 110)。

さらに、ポライトネス理論を基に日中のコミュニケーションの対照を行った母 (2002: 81-82) は、CNS は親しくない相手に対しても日本語母語話者よりポジティブ・ポライトネスを広く使用し、親族以外の人と関係を構築する際にも「親族のように聞き手への接近を試みる」(ibid: 81-82) ことが可能であると指摘した。

以上の先行研究から、総じて日中母語話者の発話行為の方略には相違があり、日本語母語話者が「あいまい／婉曲的」な表し方とネガティブ・ポライトネスを選好するのに対し、中国語母語話者は「率直な／理由を強調する」表し方とポジティブ・ポライトネスを選好するという傾向が明らかにされてきた。

3. 否定的評価に関する本研究の位置づけ

次に、発話行為研究の中でも、関崎 (2014)、林 (2015) のように否定的評価を中心に取り上げた研究について概観する。本研究における「否定的評価」の定義を、関崎 (2014: 12) の定義を踏まえ、次のように定義する。「会話の相手と相手の行動が慣習や規範、倫理・道徳から逸脱していて意義が低いと認め、それを表現すること」である。関崎 (2014) は、親しい大学生同士の雑談に現れる「否定的評価」を中心に、否定的評価の対象 (行動や思考など)、表現方法、さらに談話の構造に焦点を当て、談話中の否定的評価の出現の契機およびその収束を分析した。林 (2015) では日韓母語話者の自然談話を対象に、否定的評価の出現の仕方、否定的評価をした後のフェイスの補償を検討している。

これらの研究は親しい関係にある友人同士の雑談に現れる「からかい」や「つつこみ」など、自然会話の中の「遊び」を取り上げており、分析対象は雑談の中で現れた相手の

「行動、思考、性格」(関崎 2014: 63) などに対する否定的評価がほとんどである。しかし、1 節で述べたように、日常生活に存在している否定的評価は「遊び」を前提としたものだけではない。人間関係にひびが入ることを危惧しながらも、相手への否定を迫られる場面は、誰でも一度は経験したことがあるはずである。そこで本研究は、対話相手が社会的規範に明らかに違反した行動をとる場面と、その場面における協力者の発話を分析対象として取り上げる。また、先述の先行研究が主に談話分析を中心とした質的研究であるのに対し、本研究は談話完成テストを用い、その結果を統計手法を用いて量的に分析する。

なお、「否定的評価」に隣接する研究分野として「不満表明」(初鹿野ほか 1996、崔 2009、程 2012)、「改善要求」(天野 2013、李 2015) がある。これらの研究では、話し手が聞き手から何らかの「不利益」を受けている場面を扱うものが多い。本研究で扱う場面は、少なくとも発話の時点で、話し手と聞き手の間に利益関係がなく、不特定多数の第三者または聞き手の利益のみが関わってくるという点で、「不満表明」と「改善要求」の先行研究とは区別して扱うこととする。

4. 調査及び意味公式

4.1. 調査方法及び調査の概要

本研究は、調査方法として談話完成テスト (Discourse Completion Test; 以下、DCT) を採用する。逸脱的な場面における発話の収集方法には、自然会話録音、ロールプレイ、質問紙調査など、多様なものがある。本研究で扱う「せめぎあい」の場面は、日常生活には確かに存在するが、その自然会話データを収集することは容易ではない。また、本研究は量的な手法に基づき日中母語話者の発話の対照を行うため、短時間で統計処理に必要とされる大量のデータを収集する必要がある。さらに、1 節で述べたように、本研究は発話の背後にある日中母語話者の「規範」意識を探ることを目的の一つとしている。こうした理由から「自然会話やロールプレイに比べて、発話行為に影響を及ぼす社会的、心理学的要因を洞察できる」(Beebe, L.M, and Cumming, M.C 1996: 80 筆者訳) DCT が最も有用だと考え、これを採用した。場面設定にあたっては、具体的な対人関係として「普段冗談が言える程度の親しさ」という社会的距離 (Distance) と、「先輩／後輩」という上下関係 (Power) を設定した。また先述のように、対話相手が社会的規範から逸脱した行為を行う場面を設定する。対話相手の行為の適切な設定を行うにあたり、行為の「逸脱度」を判断するため、2017 年 5 月に日本語母語話者 30 人 ($M=21.4$ 歳、 $SD=5.09$)、中国語母語話者 30 人 (うち 6 人年齢不明、残り 24 人 $M=28.6$ 歳、 $SD=4.84$) を対象に予備調査

を行った。調査は質問紙によるもので、合計7つの場面¹について、「上記行為は、社会的通念に照らして、どの程度よくないですか？」と質問し、「①よくないとはいえない」から「⑦極めてよくない」まで、7段階の尺度を用いて測定した。この調査では場面の逸脱度の高低を測ることだけを目的としたため、協力者に場面の状況そのものに集中してもらう必要があった。そのため「上下関係」を想起させないよう、発話の対象者は「Aさん」と記述した。

以上の予備調査の結果から、逸脱度が高い場面と低い場面が2つずつ導かれた。² 具体的な場面は、以下の通りである。

- ① 「相手が図書館で手に取った本を本棚に戻さず帰ろうとする。」(「本の返却」)
- ② 「相手が駅のホームで歩きスマホ(歩きながらスマートフォンを操作すること)をしていて危うく他の人にぶつかりそうになる。」(「歩きスマホ」)
- ③ 「相手がコンビニで必要以上の商品を購入する。」(「買い物」)
- ④ 「相手が普段から忘れ物が多く、今日も携帯を忘れてきた。」(「忘れ物」)

以上の場面①と場面②は逸脱度の平均値が高い場面で、場面③と場面④は逸脱度の平均値が低い場面であった。4つの場面はそれぞれ、①「自分で取った本は自分で本棚に戻すべきだ」、②「歩きスマホはやめるべきだ」、③「買い物は必要なものだけを買うものだ」、④「大人は自己管理ができるはずだ」という「規範」から逸脱していると考えられる。その後、実際に上記の4場面の逸脱度の高さおよびJNSとCNSの同じ場面に対する認識の相違をより正確に検証するために、二要因混合計画の分散分析(2-way mixed ANOVA)を行った。その結果、日中共に①「本の返却」②「歩きスマホ」の2場面について逸脱度が高いと認識され、③「買い物」④「忘れ物」の2場面について逸脱度が低いと認識されることが判明した。また、各場面において日中間で認識に差が少ないことが確認された。³

¹ ①「昼食時に学校の食堂の裏側の入り口から入る」、②「図書館で取った本を戻さないまま帰ろうとする」、③「ルームシェアをしているのに外出する時に鍵をかけない」、④「駅のホームで歩きスマホをする」、⑤「コンビニで大量に買い物をする」、⑥「よく忘れ物をする」、⑦「食堂で料理を多めに頼む」という、日常生活で遭遇しうる7つの場面を設定した。

² 選出にあたっては調査協力者のコメント(例：ルームシェアは経験したことがないなど)および同じ場面に対するJNSとCNSの逸脱度評価の平均値を基準にした。同じ場面に対するCNSとJNSの評価の平均値は異なるが、最も平均値が低い結果でも2.33(JNS/忘れ物)であり、「良いとはいえない」よりも逸脱度が高いと判断されていた。すなわち、本調査に採用された全ての場面に一定の逸脱度の存在を確認できたといえる。

³ ANOVAの結果、場面①(本の返却)、場面②(歩きスマホ)と場面③(買い物)、場面④(忘れ物)の逸脱度は、日中両方共に分かれていることが分かった。逸脱度の主効果は： $F(3, 150) = 58.815, p < .001, \eta^2 = .297$ と有意であった。母語話者(JNS/CNS)の主効果は： $F(1, 58) = 0.275,$

以上の予備調査の後、調査対象者を変更し、2017年5月～8月にかけて本調査を実施した。本調査では、予備調査で検証された4場面にそれぞれ「先輩」、「後輩」という上下関係の要因を導入し、合計8場面を回答項目に含めた。調査対象者はJNSとCNS各40人である。JNSの年齢は18歳から25歳 ($M=20.45$, $SD=1.69$) で、大学の学部生・院生と社会人の計40人だった (うち男性20名、女性20名)。CNSの年齢は18歳から27歳 ($M=23$, $SD=2.11$) で、大学の学部生と社会人の計40人であった (うち男性20人、女性20人)。なるべく自然な発話に近いデータを収集するため、調査票には「普段実際に話すように回答してください」との指示を加えた。次節では、以上の方法で収集したデータに基づき、意味公式を構築する。

4.2. 意味公式の構築

「否定的評価」に関する先行研究ではDCTを利用したものが少ないことから、「不同意」「不満表明」「改善要求」などの近接領域の先行研究 (初鹿野ほか 1996、天野 2013、Shea 2003、程 2012、王 2015) を参考に、本研究に合わせた意味公式を再構築した。本研究では、収集した発話の中で、パラ言語的な要素 (プロソディー、韻律の操作など) を用いずに単独で否定的な意味の伝達が意味論、語用論的に可能なものを「主要部」とし、それ以外のものを「周辺部」とする。詳しくは下記の例で説明する。

$p = .602$ と有意な差は見られなかった。交互作用は: $F(3, 150) = 5.790$, $p = .002$, $\eta^2 = .040$, と有意であったので、母語話者と逸脱度のそれぞれの単純主効果を検討した。場面①: $F(1, 58) = 0.654$, $p = .422$, $\eta^2 = .011$, 場面②: $F(1, 58) = 1.766$, $p = .189$, $\eta^2 = .029$, 場面③: $F(1, 58) = 1.458$, $p = .232$, $\eta^2 = .025$ となり、場面①～場面③において母語話者の単純主効果は有意な差は認められなかった。場面④においては、母語話者の単純主効果は $F(1, 58) = 7.278$, $p = .009$, $\eta^2 = .112$ となり有意な差が認められた。場面④以外で有意な差が認められた場面はなかった。逸脱度の単純主効果を確認したところ、中国語母語話者の逸脱度の主効果は、 $F(2, 59) = 13.412$, $p < .001$, $\eta^2 = .152$ となった。日本語母語話者の逸脱度の主効果は、 $F(3, 87) = 57.60$, $p < .001$, $\eta^2 = .479$ であった。中国語母語話者と日本語母語話者は両者とも、逸脱度によって場面に対する評価が有意に異なるということが分かった。なお、それぞれの場面の間に相違が認められたかを検証するために日中の逸脱度の多重比較を行った結果、場面①と場面②の間に逸脱度の違いはなく、場面③と場面④の間にも逸脱度の違いはない。場面①と場面②の逸脱度はそれぞれ場面③と場面④より有意に高いということの日中両方で検証できた。日中逸脱度の多重比較の結果は以下の通りである。中国語母語話者の場合は、場面① vs 場面②: $t(29) = .757$, $p = .455$ であり; 場面③ vs 場面④: $t(29) = 2.088$, $p = .091$ である。場面① vs 場面③: $t(29) = 4.669$, $p < .001$; 場面① vs 場面④: $t(29) = 3.760$, $p = .002$; 場面② vs 場面③: $t(29) = 5.467$, $p < .001$; 場面② vs 場面④: $t(29) = 4.356$, $p < .001$ という結果が得られた。日本語母語話者の場合は、場面① vs 場面②: $t(29) = .474$, $p = 1.0$; 場面③ vs 場面④: $t(29) = .12$, $p = 1.0$; 場面① vs 場面③: $t(29) = 7.874$, $p < .001$; 場面① vs 場面④: $t(29) = 9.256$, $p < .001$; 場面② vs 場面③: $t(29) = 8.51$, $p < .001$; 場面② vs 場面④: $t(29) = 9.637$, $p < .001$ という結果が得られた。

- ① 先輩、忘れ物多いですよ。 [忘れ物／先輩]
 周辺部 主要部
- ② 次に机を使う人にも図書館の人にも迷惑がかかるから、返さなきゃいけないよ。
 主要部 主要部
 [本の返却／後輩]
- ③ コンビニのものが欲しくなるのは分かるけど、ほどほどにしなよ。 [買い物／後輩]
 周辺部 主要部

①では、発話の冒頭の「先輩」は、単独では否定的な意味の伝達として成り立たないので、否定的評価の周辺部とする。②の発話における「次に机を使う人にも図書館の人にも迷惑がかかるから」という「従属節」は、相手に本を戻すよう説得するための「理由」と解釈できる。また、この従属節が「次に机を使う人にも図書館の人にも迷惑がかかるから…」のように、「言いさし文」(白川 2009)の形で現れた場合は、否定的な意味伝達としても十分に機能すると考えられる。このような、単独でも否定的な意味の伝達が達成可能なものを「主要部」とした。一方、③で示したように、従属節である「コンビニのものが欲しくなるのは分かるけど」という発話は、後続する主節がない場合、否定的な意味の伝達が十分だとは考えにくい。この場合は、単独では否定的な意味の伝達が達成できないと判断し、本研究では周辺部とした。

次に、意味公式の考え方について述べる。否定的評価といえは、「汚い」、「だめだ」など、マイナス評価を表す形容詞、形容動詞がよく用いられる。また、普段は中立な意味を表す場合もあるが、特定の文脈で一時的にマイナス評価語の機能を果たす言葉も多々ある(例:「また携帯を忘れてきた?」の「また」など)。本研究では以上のような表現／語が含まれるものを「マイナス評価語」に分類した。一方、「マイナス評価語」には含まれないが、「はあ?なに言ってるの?」のような、明らかに相手を問い詰めて非難している発話は「その他」に分類した。更に、この2種類の発話(「マイナス評価」と「その他」)は、全て相手が行った逸脱的行為そのものに対する「批判」として考えられるため、「批判」という上位の意味公式に分類した。また、「バカ」や「アホ」など、逸脱した行為そのものに対してだけでなく、行為を引き起こした相手に対して罵る表現／語を用いて否定的評価をする発話もあった。このような発話は「悪態／罵り」として分類した。しかし、ことばには「表意」(explicature)と「推意」(implicature) (Sperber & Wilson 1999, 邦訳: 221)があるため、推論によって結果的に「否定的評価」として機能する発話も多くある。例えば、「本の返却」の場面で「せめて返却棚に戻しましょうよ」と相手に対して改善要求をする場合は、同時に相手の行為に対して否定的評価を加えているとも考えられる。本研究では、このように間接的に否定的評価を為す発話を、以下の表1に示した意味機能に従い、

③「直接改善要求」から⑥「確認／ほのめかし」に分類した。⁴ 意味公式の詳細、意味機能および発話例は表 1 の通りである。なお、下表の発話例の括弧内の「先輩／後輩」は、「先輩／後輩に対しての発話」という意味である。

表 1 主要部の意味公式

	意味公式	下位意味公式	意味機能	発話例
①	批判	マイナス評価語 ⁵	良くない、駄目、危ないなど評価性を持つ語、または中立な意味を表す場合もあるが、文脈の中で一時的に否定的評価を表す語。	「そんなのダメだよ。」(JNS／本の返却／後輩) 「这样不太好」(それはよくない)(CNS／本の返却／後輩)
		その他	マイナス評価語、悪態／罵りに関する言葉を伴わないが、相手を問い詰めたりして、非難として捉えられる発話。	「それを誰もがするようになったらどうなると思う？」(JNS／本の返却／後輩)
②	悪態／罵り ⁶		逸脱した行為そのものを否定的に評価するだけでなく、罵る語を用いることで相手を責める発話。	「卧槽傻逼」(バーカ)(CNS／買い物／後輩)
③	直接改善要求 ⁷		相手に逸脱した行為を改善するよう直接的に要求する発話。	「家出る前に確認しような」(JNS／忘れ物／後輩) 「少拿点少拿点！」(減らして！減らして！)(CNS／買い物／後輩)

⁴ 意味公式の認定にあたっては、はじめに筆者が意味公式の分類基準を設定したのち、CNS 1 人、JNS 2 人に個別で判断してもらった。判断の結果が分かれた場合、議論のうえ、より適切だと判断されるものを採用した。

⁵ 天野 (2013: 148) は「間接的改善要求」の種類について、「状態描写－マイナス評価語」、「状態描写－臨時的マイナス評価語」を挙げている。本研究では「マイナス評価語」という用語を援用したが、定義は天野 (2013: 148) に基づくものである。

⁶ 本研究の「悪態／罵り」は王 (2015: 7) の「相手を言葉で攻撃する」、「言葉攻撃」を参考にし、設定したものである。

⁷ 本研究における「直接改善要求」、「間接改善要求」(下位意味公式の ①規範言及、②行為結果／不利益の対象者言及も含む)の意味公式及び定義は、初鹿野ほか (1996:130) の「①改善要求—a. 直接改善要求」、「②命題の内容の表出」の表現及びその定義を参考に、加筆・修正したものである。

④	間接改善要求	規範言及	社会的規範、通念、常識、改善要求の根拠となる拘束力のある状況に言及する発話。	「それでも戻すのはマナーやろ」(JNS/本の返却/後輩) 「理性消費」(理性的に消費しなきゃ)(CNS/買い物/先輩)
		行為結果/不利益の対象者言及	逸脱した行為により引き起こされる好ましくない結果、またはその好ましくない結果の被害を被る人の存在を示唆する発話。	・「怪我させてからじゃ遅いんだから」(JNS/歩きスマホ/後輩) ・「我们还是不要给别人增加工作量了吧」(他人の仕事を増やさないでよ)(CNS/本の返却/先輩)
		申し出	相手の逸脱した行為の改善に手伝える意欲を示すことで改善要求を促す発話。	「持ち物リスト作ってあげるよ」(JNS/忘れ物/後輩)
		軽量化	相手が逸脱した行為を改善することはそれほどの負担や不利益を被らないことを伝え、相手に改善を促す発話。	「耽误不了多长时间」(そんなに時間かからないから。)(CNS/本の返却/後輩)
⑤	冗談/皮肉/からかい		マイナス評価語、悪態/罵りに関する言葉を伴わず、流行語/冗談/アイロニー/大きさに言うなどの方法を使用した発話。	「学姐包养我吧？」(先輩貢いでくれる?)(CNS/買い物/先輩) 「你能不能不这么6」(お前そこまでうまくなくてもいいんだよ)(CNS/歩きスマホ/後輩)
⑥	確認/ほのめかし		質問や確認など、相手に余地を与える形の発話で、より婉曲的な表現やほのめかしで相手に自分の逸脱した行為を気づかせる発話。	「お金大丈夫ですか？」(JNS/買い物/先輩)

なお、周辺部には「緩和」、「呼称」、FTA を徹底的に避ける「回避」という3つの意味公式を立てた。詳細は下表2の通りである。

表2 周辺部の意味公式

	意味公式	意味機能	発話例
⑦	緩和	個人体験や前置きなど、否定的評価を行うことで相手への侵害度を減らす発話。	「確かにそうかもしれないですけど」(JNS/本の返却/先輩) 「わたしもたまたまに買いすぎちゃいますけど」(JNS/買い物/先輩)
⑧	呼称	対称と自称がそれぞれ使われる発話。二人称の相手を呼称で呼び、親しみを表す呼び方(対称)。相手と同じ立場であることを示すために使われる一人称複数(自称)。	「先輩」(対称)(CNS, JNS/忘れ物、本の返却など) 「咱们, 我们」(私たち)(自称)(CNS/本の返却など)
⑨	回避	相手の行為に一切言及せず、否定的評価を徹底的に回避するか、相手の行為に賛成する発話。	「没事」(大丈夫)(CNS/忘れ物/後輩)

5. 結果と考察

本節では、DCTで収集したデータを上の意味公式に分類し、その使用回数にカイ二乗検定と残差分析⁸を行った結果を基に、日中間の全体的なストラテジーの使用の類似点・相違点について分析・考察を行う。なお、4.1節で述べたように、本研究は「上下関係」と「逸脱度」の要因を導入しており、厳密にはその要因の影響による意味公式の使用頻度の相違もあるはずだが、紙幅の都合上それについての考察は別稿に譲ることとする。

各意味公式によって逸脱的な場面における日中母語話者の使用頻度が異なるかどうかを尋ねるためにカイ二乗検定⁹を行ったところ、各意味公式によってJNSの使用比率とCNSの使用比率は有意に異なっていた ($\chi^2(8) = 116.477, p < .01, \text{Cramer's } V = 0.345$)。さらにクロス集計表の残差分析によって各意味公式の使用回数の差を検討したところ、「批判」における日中母語話者の比率の差（調整済み標準残差：6.8, $p < .01$ ）、「悪態／罵り」における日中の比率の差（同 2.4, $p < .05$ ）、「冗談／皮肉／からかい」における日中の比率の差（同 6.6, $p < .01$ ）、「確認／ほのめかし」における日中の比率の差（同 3.9, $p < .01$ ）、「緩和」における日中の比率の差（同 2.1, $p < .05$ ）と「呼称」における日中の比率の差（同 3.9, $p < .01$ ）が有意であった。「直接改善要求」（同 1.3）、「間接改善要求」（同 0.4）と「回避」（同 1.3）においては日中間に有意差は認められなかった。以上の結果をまとめると表3のようになる。

表3 JNS, CNSの各意味公式の使用回数と残差分析の結果

	母語話者 意味公式	JNS 使用回数／ 有意水準	CNS 使用回数／ 有意水準
①	批判	168 ▲ **	68 ▽ **
②	悪態／罵り	7 ▽ *	18 ▲ *
③	直接改善要求	134	142
④	間接改善要求	89	87
⑤	冗談／皮肉／からかい	18 ▽ **	75 ▲ **

⁸ カイ二乗では同じ条件での2グループの間の頻度に統計的有意差の有無を調べることができるが、それだけでは、どのセルの効果で有意差が生じたかがわからない。どのセルの効果を特定するために、残差分析も行った。

⁹ カイ二乗の結果及び調整済み標準残差の報告の仕方は木山（2016）に準拠している。

⑥	確認／ほのめかし	44 ▲ **	13 ▽ **
⑦	緩和	20 ▲ *	8 ▽ *
⑧	呼称	17 ▽ **	44 ▲ **
⑨	回避	11	17

▲有意に多い、▽有意に少ない

+ $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$

「直接改善要求」、「間接改善要求」、「回避」の使用に関してはJNS/CNS間で有意差は認められない一方、JNSは「批判」、「確認／ほのめかし」、「緩和」の使用が有意に多く、対してCNSは「悪態／罵り」、「冗談／皮肉／からかい」、「呼称」の使用が有意に多かった。この結果について、次節で具体的な分析と考察を行う。¹⁰

5.1. 日中の類似点

まず、使用傾向に有意差が認められなかった、すなわち日中の類似点である「直接改善要求」、「間接改善要求」、「回避」という三つのストラテジーの使用に注目する。「直接改善要求」は相手に行為の改善を直接的に要求するのに対して、「間接改善要求」は規範、結果、状況などを利用してより婉曲的に改善要求を伝えるものである。いずれも相手に逸脱行為の改善を要求する点では共通する。本研究の調査結果でこれが見られたのは、調査場面に導入された「逸脱度」と「親しさ」という要因が関係したためだと考えられる。親しい関係においては相手のフェイスへの脅かしの度合いは相対的に低くなる。したがって、逸脱的な行為をした相手に対して規範の遵守を促すことがしやすくなる傾向が、日中共に存在することが分かった。当然、いかに「親しい」間柄でも相手の行動を指摘するようなことは忌避すべきだと考える協力者もいる。そのような協力者の選択は、日中ともに「回避」というストラテジーに反映されている。

¹⁰ 当然、各意味公式が単独で現れた場合もあれば、他の意味公式と併用された場合もある。しかし一概に併用と言っても状況が複雑である。例えば、「批判」と併用する意味公式の中で、「批判」のFTAを軽減するものもあれば（批判＋緩和）、そうでないものもあった（批判＋直接改善要求）。そのため、本研究では各意味公式を個別に取り上げて記述する。

5.2. 日中の相違点

5.2.1. 「批判」を用いる JNS と「悪態／罵り」を用いる CNS

次に、日中の相違点について分析する。まず、日中母語話者が多用したストラテジーの中では、相手をあからさまに (B&L 1987, 邦訳: 90) 指摘するストラテジー (行為そのものへの指摘か、本人への攻撃かは別として) として、「批判のストラテジー」と「悪態／罵りのストラテジー」が対をなすと言えよう。

JNS の「批判のストラテジー」の使用は (調整済み標準残差: 6.8, $p < .01$)、これまでの日中対照研究 (笹川 1999, 小野 1998, 母 2002) では指摘されてこなかった JNS の一面である。この結果の背景にどのような理由と意味付けがあるのか、以下の発話例を用いて考察する。

- (1) そんなのダメだよ。(JNS／本の返却／後輩)
- (2) それを誰もがするようになったらどうなると思う？(JNS／本の返却／後輩)
- (3) 買いすぎだって。(JNS／買い物／後輩)
- (4) 危くないですか？それ。(JNS／歩きスマホ／先輩)
- (5) また忘れちゃったんですか～。(JNS／忘れ物／先輩)

「だめだ」、「すぎる」、「危ない」、「また」などの形容 (動) 詞／動詞／副詞などの統語的な資源から「問い詰め」という表現レベルの工夫は、話し手が聞き手に何等かの基準からの「ずれ」を伝えるために用いられている。一つの行為を「ずれている」と認識している以上は、その背後に「ずれていない状態」(規範) が存在し、かつ参照されているということになる。したがって、JNS のこのストラテジーの使用は、逸脱的な行為を同定する際に参照される「規範性」への端的な志向を表していると言っても過言ではない。既に報告されているように、日本人には「社会規範の内面化」(濱口・公文 1982: 48-51) があるとされる。「その規範に沿った行動だけが唯一の『正しい』、『善い』、『当然の』、『人の道にかなった』または『正常な』行動だという確信がある」(ibid: 48-51) と指摘され、「社会規範を内面化した人は、誰かが規範を守らず、規範からはずれた行動をとると、驚いたり当惑したり嫌悪を抱いたり怒ったりし、... (中略) その行動の規範逸脱の程度に応じてさまざまな否定的な感情を持つ」(ibid: 48-51) という。本研究で使用した 4 場面は、いずれも「正しい／当然／正常な」基準からずれた行為だと認識されるため、JNS の規範への志向性が活発化され、「規範」と「対人関係」の駆け引きの中で「規範優先」という結果が導かれたと考えられる。

JNS の「批判のストラテジー」とは対照的に、CNS は「悪態／罵りのストラテジー」を多用している (調整済み標準残差: 2.4, $p < .05$)。

- (6) 卧槽傻逼。(バーカ) (CNS／買い物／後輩)

(7) 我靠，你丫是猪么，吃这么多。

(やべえ～お前豚なの？ そんなにいっぱい食いやがって)(CNS／買い物／後輩)

(6) と (7) は、相手の逸脱的な行為そのものを指摘し規範性への志向を表すというより(二次的には達成するかもしれないが)、相手を侮辱する(B&L 1987, 邦訳: 86) 意味合いが強い。親しくない相手に対して用いた場合は、「本来置かれるべき距離が保たれず」(滝浦 印刷中)、相手を強く脅かす行為になってしまう。一方、親しい相手に使用した場合は、話し手が自分を「罵っても(ありのままに感情を表出しても)さほど問題がない」ほどの親友だと認識していると聞き手に解釈される可能性がある。逆に言えば、良好な対人関係を志向するコミュニケーションで、「罵りのストラテジーを使用してもお互いの関係は崩壊しない」という話し手の判断¹¹がなければ、わざわざリスクを犯してこのストラテジーが使用されることはないだろう。「悪態／罵りのストラテジー」には、話し手と聞き手相互の「関係性」に対する間主観的な認識が浮かび上がる。したがって、「悪態／罵りのストラテジー」は関係性の上に立ったストラテジーであり、場合によって親しい関係性を主張するストラテジーでもあると言えよう。

以上、「規範性」を志向する JNS の「批判」と「関係性」を志向する CNS の「悪態／罵り」のストラテジーの使用を分析した。次節では残りのストラテジーを分析していく。

5.2.2. 「遠隔化的」と「近接化的」なストラテジー

残りの JNS と CNS が多用するストラテジーは、JNS の「緩和」、「確認／ほめかし」と CNS の「冗談／皮肉／からかい」、「呼称」である。これらのストラテジーへの分析は、初期ポライトネス理論(B&L 1987)を「相手と自分の〈距離〉の遠近を伝達する手段」と再解釈した滝浦(2008: 4; 印刷中)の視点を取り入れて分析する。この視点に立つと、本来なら聞き手の「どのフェイス」に働くかによって決まるポライトネス・ストラテジーの不明瞭性から解放され、発話を「話者が活用しようとするストラテジー」として話者の視点で捉えなおすことができるからである。また、「ネガティブ／ポジティブ」のストラテジー対も「距離のストラテジー」として「遠隔的(敬避的)／近接的(共感的)」(滝浦 2008: 28; 印刷中)の対に置き換えられる。詳しくは後述するが、距離のストラテジーとして日中母語話者が多用した残りのストラテジーを捉え直すと、それが逸脱行為をした聞き手から遠ざかるか、近づくか、という二つの操作の装置として用いられていることがわ

¹¹ 当然、話し手と聞き手のお互いの「関係性」の判断にはずれが存在する可能性があるため、「悪態／罵り」の使用には人間関係を傷つける可能性も十分に考えられる。実際の対面コミュニケーションにおいてこのようなストラテジーを使用するには、話し手の発話に伴うパラ言語的、非言語的な要素が極めて重要になってくる。

かる。なお、前節では JNS の「批判のストラテジー」を記述したが、ここで特記すべき点は、「批判を用いる」JNS と先行研究で言及されている「婉曲的に何かを伝える」JNS とは、二項対立の関係性にあるように見えて、実は併存する関係、むしろ表裏一体の関係性にあるということである。¹² その証拠の一例として、本研究では JNS に「緩和のストラテジー」（調整済み標準残差 2.1, $p < .05$ ）と「確認／ほめかしのストラテジー」（同 3.9, $p < .01$ ）の使用が有意に多く見られた。まず「緩和のストラテジー」から説明する。

(8) あなたのことはあなたのことだけど、それ健康に良くないじゃない？

(JNS／買い物／後輩)

(9) 私もぶつかりそうになったことがありますけど、危ないですよ。

(JNS／歩きスマホ／先輩)

本研究で周辺部に分類されたこのストラテジーは、どうするかは相手の自由であること、相手の逸脱的な行為は話者にも経験があることを示すものであり、後続する主節の否定的評価への「緩和」の機能を果たす点で共通している。(9) は聞き手との共通した経験を主張するところから、聞き手に近寄っていくものとしても捉えられるが、主要部（主節）の否定のための「クッション」としての働きを考えると、結果的に聞き手への配慮を表すことになる。配慮している以上は、それが「敬避的／共感的」かに関わらず、発話を遠回しにデザインした分、对人的距離の感覚からいうと、「配慮なし」（主節のみ）の発話に比べ、相対的に話者が適切に遠ざかっていると言えよう。

「緩和」よりも聞き手になるべく触れないようにするストラテジーとして、JNS が多用した「確認／ほめかし」がある。

(10) 大丈夫ですかねえ？ (JNS／本の返却／先輩)

(11) 食べきれんの？ (JNS／買い物／後輩)

(10)、(11) は、終助詞「かねえ」と「の」を用いた真偽疑問文である。真偽疑問文ではあるが、「Yes/No」の回答を得るためだけの質問としてだけでなく、(10) は「本を返さないで大丈夫ではない」と逸脱的行為への指摘をほめかすものとしても理解でき、(11) は、「食べきれないともったいないから減らそう」という解釈も可能である。つまり、聞き手への「単一の明快な意図伝達」(B&L 1987, 邦訳: 89) は避けられている。「確認／ほめかしのストラテジー」に属する発話は、真偽疑問文（もしくはほかの）「形式」に含まれたぶん暗示性が増し、聞き手は話者の真意の理解が相対的にしにくくなっている。した

¹² 「婉曲」と「批判」のみならず、ほかの方略も日本語母語話者には使用されているはずである。これまで「相手との距離を保つストラテジーを多用する」という側面を強調してきた研究が多いという意味では、異なる側面に焦点を当てた本研究はそのステレオタイプの解体に貢献しうる。

がって、話し手が肯定・否定を問わず聞き手への踏み込みを避け、なるべく触れないように距離を操作するという遠隔化のストラテジーとして理解される。

一方、表3で確認したように、CNSは「冗談／皮肉／からかい」（調整済み標準残差：6.6, $p < .01$ ）と「呼称」（調整済み標準残差：3.9, $p < .01$ ）のストラテジーを有意に多用している。結論を先取りすると、このようなストラテジーの使用はJNSとは対称的な「近接化」の操作として考えられる。はじめに、「呼称」から検討する。

本研究において、「呼称」には、一人称複数を指す「自称」と二人称の相手を指す「対称」の二種類がある。

- (12) 咱们还是收拾一下吧。(私たち、やっぱり片付けてあげようか)
(CNS／本の返却／後輩)
- (13) 学长, 你这样会带坏学妹的。(先輩、後輩たちが真似しますよ)
(CNS／歩きスマホ／先輩)

(12)の下線部は一人称代名詞の複数である“咱们”を用いた自分側を指す自称表現である。中国語の“咱们”は、話し手と聞き手両方を含む、包括的な表現 (Inclusive) (Chao 1956: 217) であり、本研究のように逸脱的な行為が聞き手によっておこしたにもかかわらず、聞き手への行為の改善を促す場面で、これを用いることは、話者が聞き手と同じ領域に属し、同じ立場であることを主張するものだと考えられる。一方、(13)の下線部は二人称の相手との関係性を表す対称のストラテジーである。「先輩」という呼称に関しては、敬避・配慮を表しているという見方もできるが、面白いことに、本研究の逸脱的な場面でCNSは、先輩に対してのみならず後輩に対しても呼称での呼びかけ（“学妹（女性）／学弟（男性）”（後輩くん）という表現）を使用している。後輩に対しての「呼称」は、「敬避」とは考えられにくいいため、本研究でのCNSの「対称」の使用は、「対称を使わないで指摘する」場合に比べ、「敬避」よりは「共通した縄張り」（例、同じ学校の仲間同士）に関するイメージの想起をはかるものとして考えられる。その意味ではこれもまた、聞き手に「近接化する」ストラテジーとして考えられる。

「呼称のストラテジー」¹³は、自分と相手を包括し（話し手と聞き手は同じ縄張りにいて同じ立場である）、相手との関係性（赤の他人やよそ者ではなく、先輩後輩の関係である）を強調するため、距離的なストラテジーとして、話し手が積極的に聞き手に接近するために用いられているといえよう。

次に、CNSの「冗談／皮肉／からかい」を見てみる。このストラテジーは、話し手が流行語の使用、修辞法によってもたらした効果と「聞き手との関係性」を照合した上での

¹³ 呼称のストラテジーは、母 (2002)、平 (2006) も言及したことがある。

複合的な運用となる。詳しくは以下の発話例を用いて分析する。

- (14) 学姐包养我吧？(先輩貢いでくれる？)(CNS／買い物／先輩)
 (15) 恭喜你。(おめでとう)(CNS／忘れ物／先輩)
 (16) 土豪、我们做朋友吧。(社長／成金、是非友達になってください。)
 (CNS／買い物／後輩)
 (17) 你能不能不这么6。(お前そこまで上手くなくてもいいんだよ)
 (CNS／歩きスマホ／後輩)
 (18) 学弟、我可不会借钱给你，所以安心吃土吧。
 (後輩くん、お金は絶対貸さないから、貧乏生活をおとなしく迎えてください
 ね。)(CNS／買い物／後輩)

(14)の“包养”(貢ぐ)、(16)の“土豪”(社長／成金)、(17)の中の数字“6”(中国語で数字“6”の発音は、「俊敏」、「うまい」などの意味を表す言葉“溜”(liù)の発音と同様である¹⁴)及び(18)の“吃土”(土を食べるぐらい貧乏である)は、いずれも中国のインターネットで若者たちが使用している流行語である。流行語は「ある一時に、多くの人々の間で興味を持って、盛んに使用される単語や句」(ピラールイリヤス・姜 2012: 44)と定義されており、「世の中の変化が最も敏感に反映されている」(趙 2017: 93)ものとされている。流行語の使用には、聞き手に自分と同様の「背景知識や価値観」を持っているという話し手の判断が読み取れ、聞き手にとってもそれを正しく理解し運用できること、それを用いた発話に対して適切に反応できることが、相互に「今時のことについて知識を更新している」、「常に流行に対して敏感なセンスを持っている」、「時代遅れではない」ことの共鳴につながる。

しかし同時に、「冗談／皮肉／からかい」のストラテジーには暗示性のある表現も含まれる。例えば、「忘れ物」の場面での(15)“恭喜你”(おめでとう)、歩きスマホの場面での(17)“你能不能不这么6”(お前そこまで上手くなくてもいいんだよ)のような発話は、字義通りの意味で捉えると、「忘れ物」は「めでたい」ことになり、「歩きスマホ」は「褒めるべきこと」になる。しかしこのような発話は、話し手と聞き手の既存の想定(そのような行為は良くない)には結びつかず、その文脈をくつがえす効力(Sperber & Wilson 1986/1999, 邦訳: 145)も持っていない。これを関連性(ibid, 邦訳: 145)があるものとして理解しようとする、発話が実は言いたい事と正反対のことをわざと表出している、すなわち「皮肉／アイロニー」であるという解釈が導かれる。皮肉表現はその暗示性で聞

¹⁴ 対面コミュニケーションにおいては、「liù」という音声を発すると同時に手振りを付けて数字「6」を示し、ただの“溜”ではなく、流行語であるということを示す場合もある。

き手のフェイスが保持されることもあるが（座間 2003: 59-63）、暗示性がある分、聞き手がそれを処理する労力も相応に高まり、同等な関連性を獲得するには、その処理労力に見合った文脈効果もなくはない（Sperber & Wilson 1986/1999）。したがって、発話の背後にある真意は、聞き手に識別された時点で、「皮肉／アイロニー」を使わない表現に比べてより鮮明に聞き手の頭に残る。要するに、「より高い認知効果をもたらす」（座間 2003: 62）ということである。この意味では、文字通りの表現より強めの効果を生み出せるこの表現は、人間関係の崩壊をもたらす可能性もある。しかし、本研究で設定した「親しい間柄」を考慮すると、皮肉による「強めの認知効果」と聞き手との「親和的な関係性」を計算・見込んだ¹⁵うえで、CNSはこのストラテジーを選択したと考えられるだろう。

以上、CNSの「冗談／皮肉／からかい」のストラテジーは、流行語を取り入れて共鳴を喚起させたり、皮肉により暗示性を持たせ、同時に強い認知効果を生み出したりするという複合的なものと分析した。実際のコミュニケーションでは聞き手の所有知識やその発話のどの部分に注目するか（もしくは、話し手のパラ言語・非言語的な資源の使用状況）によって発話の解釈は異なり得るが、話し手が聞き手との親しい関係性を見込んだ上で使用するという意味では、これらのストラテジーは聞き手との関係性に基づいた近接化のストラテジーとして考えられる。なお、冗談／ジョークを利用して関係性に訴えかけるこのようなやりとりは、（平 2006: 5; 蒙 2010: 14-15）にも報告されている。

以上、本節では遠隔化するストラテジーの「緩和」、「確認／ほのめかし」を使用するJNSとは対照的に、CNSは「呼称」と「冗談／皮肉／からかい」のストラテジーを使用し聞き手に近接化することを分析した。

5.2.3. 日中ストラテジーの使用特徴のまとめ

以上のJNSとCNSのストラテジーの使用特徴を図示すると次の図1のようになる。

¹⁵ 「悪態／罵り」と同じく、「冗談／皮肉／からかい」の使用は実際に対人関係に正の影響と負の影響、どちらをもたらすかは、話し手と聞き手のお互いの関係性に対する間主観的認識次第である。

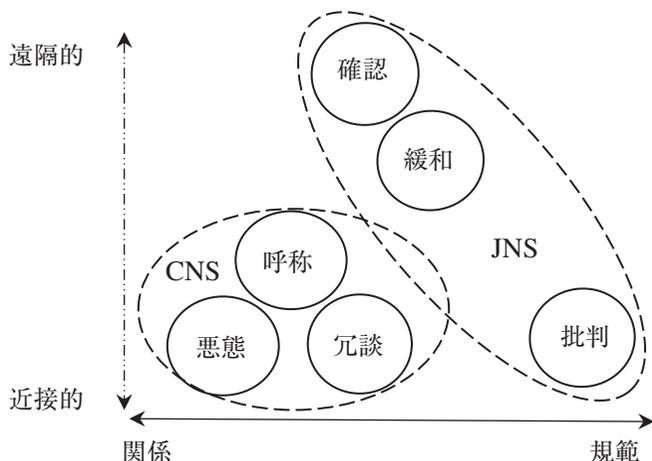


図1 「規範」・「遠隔的な」JNSと「関係」・「近接的な」CNS

図1が示すのは、「関係」と「規範」(実線・横)、「遠隔的」と「近接的」(点線・縦)という二つのせめぎあう方向の軸において産出された、JNSとCNSそれぞれの意味公式の使用の特徴である。実線の小さい楕円で囲まれた各意味公式は、JNSとCNSが有意に多用した意味公式を表す。点線の大きい楕円は、ほかの意味公式の存在及びストラテジーの併用を表し、その重なりは5.1節で分析した両者の類似点を示す。図1からすると、横の軸において、JNSは概ね「規範」を志向し、CNSは「関係」を志向することがわかる。縦の軸において、CNSのストラテジーの使用は関係をもとにした近接化するストラテジー(呼称・冗談・悪態)でひとまとまりになっているが、JNSは「敬避」(緩和・確認)と「否定的に踏み込み」(批判)するストラテジーの使用で縦軸の両側に跨る。JNSの「批判」のストラテジーの使用は、対人関係から離脱し、客観的な規範を踏まえたうえで行われるものになっている。縦の軸において「悪態／罵り」と同じように「近接的」な方向に位置付けられているが、そのメカニズムは、(横の軸で示した通り)CNSの関係性に依拠した主観的な「悪態／罵り」とは質的に異なることを付記しておく。次節では、社会文化的な観点を踏まえた上で結論を述べる。

6. 総合的考察と結論

5節で得られた日中のストラテジーの使用結果を文化論的な観点から検討すると、CNSのストラテジーの背後には、「面子」(メンツ)(笹川1999: 177-178、園田2001)と「関係」(ゲンシー)(沖ほか2018: 84-85)を文化的基盤とした中国社会の文脈が作用している可能性がある。例えば、「冗談／皮肉／からかい」の中の「社長」、「貢ぐ」のような表現は、誇張されたものでありながら、「相手が自分より上である」、「金持ちである」ことを

示し、相手を「おだてる」方略としても解釈できるからである。一方、JNSの意味公式の使用の背後には、「恥」の意識 (Benedict 1946, 邦訳: 256) の存在が考えられる。不特定多数の人が出現する (図書館/駅/コンビニ) 本研究の場面には一定の公共性 (斎藤 2000) があり、そのような場面によって触発された JNS の「恥」の働きが、CNS に比べより高い「規範」への志向性を促進したと考えることもできるだろう。

本研究では逸脱場面における否定的評価の発話の分析を通して、日中それぞれの志向/思考のパターンの一部を明らかにすることを試みた。JNS の規範重視のストラテジー使用を明らかにし、先行研究よりも複雑で複合的な CNS の「冗談/皮肉/からかい」のストラテジーについて記述した点で新規性を持つ結果が得られたと考える。本研究が、日中それぞれの語用論的な特徴、文化への相互理解を深め、異文化接触において生じる問題解決への一助となることを願う。

参考文献

- 天野景子. 2013. 『日本語母語話者の騒音場面における改善要求: 親疎関係に注目して』、『日本語・日本文化研究』23、142-153.
- 林始恩. 2015. 『親和的關係における否定的評価の研究: 日韓母語話者の言語行動の比較』、筑波大学人文学社会科学部研究科、博士学位論文.
- Yuen Ren Chao. 1956. "Chinese terms of Address." *Language* 32(1), 217-241.
- 小野由美子・劉玉琴. 1998. 「異文化ミスコミュニケーションに関する一考察: 日・中母語話者の断り表現をめぐって」、『鳴門教育大学研究紀要』13、105-112.
- 沖裕子・姜錫祐・趙華敏・西尾純二. 2018. 「依頼談話の発想と表現: 異文化接触問題の解決をめざした日韓中対照談話論」、『社会言語科学』21 巻第 1 号、社会言語科学会、80-95.
- 王倩. 2015. 「若者友人間で行われる「不満表明行為」の中日対照研究」、西安外国語大学大学院日本言語学専攻、修士学位論文.
- 木山幸子. 2016. 「語用論調査法」、加藤重広・滝浦真人編『語用論研究法ガイドブック』、東京: ひつじ書房.
- Shea, H. 2003. *Japanese Complaining in English: A Study of Interlanguage Pragmatics*. Columbia University 2003, 156-171.
- Sperber, D. and Wilson, D. 1986/1995. *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford, U.K.; Cambridge, Mass.: Blackwell. (『関連性理論: 伝達と認知』D. スペルベル, D. ウイルソン著; 内田聖二 [ほか] 訳 1999)
- 崔東花. 2009. 「不満表明とそれに対する応答: 中国語母語話者と日本語母語話者を比較して」千葉大学大学院人文社会科学部研究科研究プロジェクト報告書第 218 集『多文化接触場面の言語行動と言語管理』、接触場面の言語管理研究 vol. 7、村岡英裕編、43-63.
- 斎藤純一. 2000. 『公共性』東京: 岩波書店.
- 笹川洋子. 1999. 「アジア社会における依頼のポライトネス」、『親和国文』34、154-181.
- 白川博之. 2009. 『言いさし文の研究』東京: くろしお出版.
- 座間直樹. 2003. 「アイロニー表現とエコー発話」、『神奈川大学大学院言語と文化論集』10、33-

74.

- 関崎博紀. 2010. 「明示的ではない否定的評価の表現の方法」、『国際日本研究』2、117-138.
- 関崎博紀. 2014. 『日本人大学生の会話における言語行動としての否定的評価の研究』、筑波大学人文学社会科学部研究科、博士学位論文.
- 園田茂人. 2001. 『中国人の心理と行動』東京：日本放送出版協会.
- 滝浦真人 (印刷中) 「対人語用論」、加藤重広・澤田淳編 『はじめての語用論』、東京：研究社.
- 滝浦真人. 2008. 『ポライトネス入門』東京：研究社.
- 儲叶明. 2018. 「日中母語話者の否定的評価に関する対照研究」、名古屋大学国際言語文化研究科、修士学位論文.
- 儲叶明. 2018. 「日中母語話者の否定的評価に関する対照研究—談話完成テストを中心に」、第21回語用論学会口頭発表、大会発表論文集.
- 程铎. 2012. 『不満表明ストラテジーにおける日中対照研究』、東北大学国際文化交流論専攻、修士学位論文.
- 趙蔚青. 2017. 「2017年中国の新語・流行語」、愛知大学中日大辞典纂所『日中語彙研究』第7号、93-108.
- 友枝敏雄. 2002. 「規範の社会学」、『人間科学共生社会学』2、109-124.
- 初鹿野阿れ・熊取谷哲夫・藤森弘子. 1996. 「不満表明ストラテジーの使用傾向：日本語母語話者と日本語学習者の比較」『日本語教育』88、128-139
- 濱口恵俊・公文俊平. 1982. 『日本の集団主義（その真価を問う）』東京：有斐閣.
- 樋口文彦. 1989. 「評価的な文」言語学研究会（編）『ことばの科学』3、181-192、東京：むぎ書房.
- 樋口文彦. 2001. 「形容詞の評価的な意味」、言語学研究会（編）『ことばの科学』10、43-66、東京：むぎ書房.
- ピラル イリヤス・姜雪寧. 2012. 「流行語から見る中国社会の表現の変化」、『長野大学紀要』33、第2・3合併号、43-53.
- 富士田邦彦. 1978. 「集団意識の諸問題」、『香川大学一般教育研究』13、43-57.
- 母育新. 2002. 「ポジティブ・ポライトネスから見た日中の比較：日本語教育の視点からの考察」、『麗澤学際ジャーナル』、1(1)、75-85.
- Beebe, L. M., & Cummings, M. C. 1996. "Natural Speech Act Data versus Written Questionnaire Data: How Data Collection Method Affects Speech Act Performance." In S. M. Gass & J. Neu (eds.) *Speech Acts Across Cultures: Challenges to Communication in a Second Language*, 66-86. Berlin: M. de Gruyter.
- Brown, P., and Levinson, S. C. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge Univ. Press. (『ポライトネス 言語使用における、ある普遍現象』、田中典子 監訳、研究社、2011)
- 平静. 2006. 「日中のポジティブ・ポライトネスの対照研究：日本語と中国語の談話分析を通して」、『比較社会文化研究』20、1-19.
- 蒙韞. 2010. 「日中断りにおけるポライトネス・ストラテジーの考察：日本人会社員と中国人会社員の比較を通して」、『異文化コミュニケーション研究』22、1-28.
- 李国玲. 2015. 『改善要求発話の日中対照研究：認知コミュニケーション論の観点から』、筑波

大学国際日本研究、博士学位論文.

Ruth, B. 1946. *The Chrysanthemum and the Sword*. Charles E. Tuttle Company. (『定訳菊と刀：日本文化の型』長谷川松治 訳、株式会社社会思想社)
世界大百科事典第2版 株式会社平凡社